

信徒講座：宣教の使命に生きる⑥

VIII. 現代の諸「宣教会議」

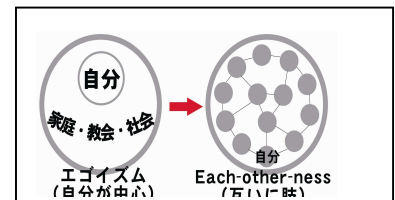
- ・20世紀の宣教会議：20世紀に入りそれ迄個別の宣教団体によって行われていた宣教活動を互いの理解と協力という角度から見直すような「宣教会議」が幾つか開かれた。その第一が1910年の「エジンバラ宣教会議」で、J.R.モットが主導権を取り、今日迄続くエキュメニカル運動の始まりとなった。この会議の結果「国際宣教協議会(IMC)」が発足し、その後の世界宣教を集約・強化する事となった。更にこの働きは「世界教会協議会」(WCC)に発展した。また、1974年の「ローザンヌ世界伝道会議」は、その後の福音派による世界宣教に大きな影響を与えた。それ迄の、個人の回心に焦点を当てた狭い意味での伝道だけでなく、社会的責任も含む広い視野の宣教が意識されるようになった。ジョン・ストットが主導した「ローザンヌ誓約」でその事が謳われ、ワールド・ビジョンや国際飢餓機構の働きに具現された。更に第三回ローザンヌ世界宣教会議として2010年にケープタウン宣教会議において、宣教協力が確認された。同会議の「決意表明」(コミットメント)として、幅広い宣教理解に立ちつつも、聖書的な切先を明確にした方向性が謳われ、「全福音を、全世界に、全教会で広めよう」という決意表明が打ち出された。第4回ローザンヌ世界宣教会議は、今年2024年韓国で開かれる。
- ・ミッシオ・ディ(神の宣教)の強調:前記の諸宣教会議で屢々使われた言葉が「ミッシオ・ディ」(神の宣教)である。社会正義の確立を含む広義の「神の支配」、「神の国の確立」こそが宣教であるとの理解である。ただ、この考え方の弱さは、人類の墮落と失われた人々への伝道の急務から目を離してしまう危険である。私は、宣教とは、それによってのみ救いを齎す福音の伝達を切先とし、その結果として生じる教会の形成を第一に考え、その教会をして社会における預言者的働きを為さしめるように後押しする事と理解する。

IX. 宣教協力の必要性と課題

1. 教会間・教派間の宣教協力 (2009日本伝道会議@札幌での竿代提案を元に)

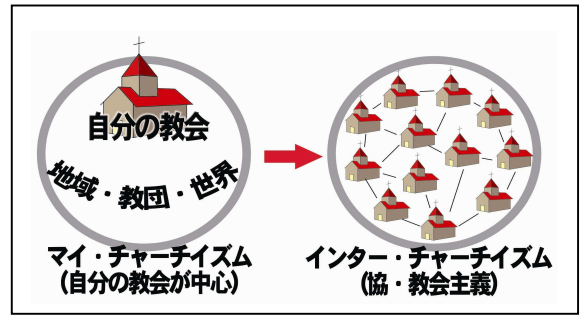
- ・教会の「公同性」:教会とはそもそも公同的なものである。それを、深く認識し実践する事を求めるのが公同教会主義。その為に三つのパラダイムシフトを提唱したい。

- ①エゴイズム(自分中心主義)から「お互い主義」へ:ポストモダニズムの精神である極端な個人主義(egoism)から、「互いの建徳」、つまり「お互い主義」(eachotherness)は、地域教会にあっても、それ以外の世界にも適用されるべき生き方。



- ②マイチャーチイズム(自分の教会中心主義)から公同教会主義へ

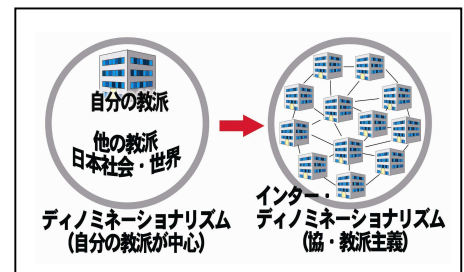
教会の基礎が、ローカルチャーチ(地域教会)にある事を重々認めつつ、又、地域教会への忠実さが信徒の基礎である事を重々認めつつも尚、地域教会の営みだけを重視する狭い「マイ・チャーチイズム」を乗り越えて「協教會的」交わりと活動を大切にする事、特に特定地域における教会同士の協力と交わり



が神の国の進展のために重要である。第4回日本伝道会議札幌宣言「私達は地獄的宣教協力の分野に於て、より具体的な方策を計画し実施します。『地域社会こそ、第一の伝道の間である』との認識を深め、私達は文化や風習、歴史や経済を共有する各地域の中で福音を証する為に、あらゆる面で主の導きを仰ぎつつ有効な協力体制を組んで伝道の危機を乗り越えます。」

③ディノミネーションナリズム(教派エゴ)から協教派主義へ:

各教派が生まれた歴史的・撰理的な意義を十分に認め、その異なる強調が全体の教会に仕えるものである事を認めつつも、自らの教派の存在を絶対視し、自己完結的な狭い「教派主義」から脱却して、協教派的な協力と伝道を実践する。プロテスタント諸教会は、ローマ・カトリック教会という巨大組織に対抗し、また、諸地域の特殊性に影響を受けつつ自然発生的に誕生した。聖書それ自体の



含む多面性の故に、各教派は独自の強調点をもって存在している。しかし、自らの教派の存在を絶対視し、自己完結的に捉えると教派エゴイズムとなる。諸々の教派の存在をキリストの体の肢の一つと捉える心の広さが大切。協力の基礎は「公同的な」教会観、(誤り無き神の言葉と信じる)聖書観、地域制、教派別の特色を尊重しつつもこれを相対的と見る客観的姿勢が大切。更にエゴイズム(自分中心主義)からイーチャザーネス(お互い主義=キリストの体に繋がっている肢として、互いが互いを必要としている共同体の一部である)との認識転換が必要。

2. **パラチャーチ伝道:**更に、一教会ではカバーしきれない青年伝道、放送伝道、国外宣教、ディアスポラ伝道などのパラチャーチ伝道や教育、福祉などの多方面で、多くの教派・教団・教会が協力して支えて行く事が有意義である。

3. **日本伝道会議の存在と意義:** 1974年に第一回日本伝道会議が京都で開かれ(主講師はジョン・ストット)、1982年に第二回(於・京都)、1989年に第三回(於・那須高原)、2000年に第四回(於・沖縄)、2009年に第五回(於・札幌)、2016年に第六回(於・神戸、主講師は、クリス・ライト)と積み上げられてきた。2023年9月、第七回が岐阜で開かれた。JEA(日本福音同

盟)が主体であるが、参加は広く福音派の諸教会・団体に開かれている。会議の為の会議ではなく、会議毎に次の会議迄の協力関係と内容(所謂、プロジェクトと言う名前でその分野が示され、ロードマップという形で活動目標が示された。会議では、参加者のコイノニアが重視され、全員が計画・立案に参加できるように工夫された。プロジェクトの中には、持続可能な社会の構築(環境問題など)、災害対応、ファミリーミニストリー、ディアスポラ宣教協力、ビジネス宣教協力、教会開拓、青年宣教、子供ミニストリーなど生活に密着した多くの課題が扱われた。